

岡山大学 MONTHLY DIGEST

VOL. 96
2024.4

TOPICS

1

令和6年度岡山大学入学式、大学院入学式を挙行



本学は4月2日、令和6年度岡山大学入学式及び大学院入学式をジップアリーナ岡山で行い、学部生・大学院生ら計3,521人の入学を祝福しました。

新入生を代表し、グローバル・ディスカバリー・プログラムの朝倉愛莉さんが「私たち新入生は、歴史と伝統ある岡山大学において、目の前の課題に真摯な姿勢で取り組み、社会に貢献できる人間となるべく、勉学に励み、学生生活が実りあるものとなるよう努力することを誓います」と宣誓しました。

続いて行われた「金光賞」の第7回授賞式では、那須学長が大学院生と学部学生の受賞者代表2人に表彰状と顕彰金目録を手渡し、「この受賞を契機に、一層の研究への励みとし、これからも更なる活躍を期待しています」と激励しました。

今回は各大学院・学部等から計22人が顕彰されました。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id12984.html (入学式)

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id12992.html (金光賞)



(入学式) (金光賞)

TOPICS

2

腸健康科学研究センターの看板除幕式を開催

本年4月に全学センターとして「腸健康科学研究センター」を設置し、4月9日に同センターの看板除幕式を挙行了しました。除幕式セレモニーでは、那須保友学長、成瀬恵治センター長(大学院医歯薬学総合研究科長)、三好伸一副センター長による除幕で、新たな看板がお披露目されました。

本学の研究マネジメント体制のもと、多分野統合型の研究体制・組織を構築し、人(患者と健常者)のデータを利活用した網羅的な腸研究を推進し、社会実装へ繋げ、腸と人の健康増進に貢献すること目指し、本センターを設置しました。

本センターは活動目的として、①腸に関する研究リソースの統合及びデータ活用による網羅的な腸研究の推進、②学際的な共同研究体制の強化と国際的な急性腸疾患アウトブレイクへの備え、③慢性腸疾患及び腸内フローラ関連疾患の病態生理の国際的視点からの解明、④将来的な腸疾患研究や腸健康科学研究の中核を担う若手研究者等の人材育成、の4つを掲げています。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id13009.html



Pick up!

ファジアーノ岡山が附属中学校サッカー部で 休日部活動サポートを開始!



4月13日、教育学部附属中学校で一般社団法人ファジアーノ岡山スポーツクラブによる部活動サポートが始まりました。

当日は、サッカー部員17人が、プロの指導者から練習時の心構えや1対1の守備の仕方といった実技指導を受けました。最初は緊張した様子でしたが、緊張がほぐれるにつれ大きな声も出はじめ、笑顔でプレーしていました。

指導を受けたキャプテンの渡辺貴之さん(3年)は「ボールを使わないメニューもあり新鮮でしたし、高いレベルの指導を受けて充実した練習ができました。平日の練習にも生かしていきたいです」と感想を述べました。

附属中学校では、サッカー部での状況を踏まえ、他種目でもサポート委託を検討することにしており、さらなる生徒のスポーツ機会の確保と教員の働き方改革に取り組んでまいります。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id13039.html



TOPICS

3

異分野基礎科学研究所の仁科教授が文部科学大臣表彰を受賞

「令和6年度科学技術分野の文部科学大臣表彰」の若手科学者賞に本学異分野基礎科学研究所の仁科勇太教授が選ばれ、4月17日、文部科学省で表彰式が行われました。

仁科教授は「黒鉛の二次元材料化および機能開拓に関する研究」の業績が評価され受賞。黒鉛から得られる二次元炭素材料は、化学・物理・生物・医学など、幅広い分野において研究が行われています。しかしその合成においては、構造や物性の再現性が極めて低く量産化が困難という問題がありました。仁科教授は、この問題を解決するために、放射光施設等を利用する新たな分析手法を検討し、黒鉛から二次元材料を作製するメカニズムを解明し、再現性良くキログラムスケールでの製造を実証しました。また、二次元炭素材料の新機能を創出するために、化学修飾による新素材開発を行い、バイオマテリアル、電極材料、吸着材、触媒などへの応用を達成しました。

仁科教授は、「国内外・産学界の多くの方と議論し、築き上げてきた成果がこのように認められたことは、大変嬉しく思います。自分の研究にさらに磨きをかけるとともに、これまでの経験をより若い世代の研究者と共有し、岡山大学の研究者が世界のトップクラスに肩を並べられるよう切磋琢磨していきたい」と述べました。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id13044.html



TOPICS

4

2023年度若手トップリサーチャー研究奨励賞
蔡准教授、中道研究准教授を表彰

「岡山大学若手トップリサーチャー研究奨励賞」の2023年度文系受賞者に学術研究院社会文化科学学域の蔡暁静准教授、理系受賞者に岡山大学病院の中道亮研究准教授を選出し、3月27日に学長室で表彰式を行いました。

蔡准教授は、計量ファイナンスが専門で、ESG投資を中心とする金融市場のデータ分析を中心に、計量ファイナンスの知識と機械学習・ディープラーニングの知識を融合させた先進的な研究に取り組んでおり、国際的にインパクトの高い研究成果を創出し、Q1ジャーナル等の国際的査読誌へ多く発表されている点が高く評価されました。また、中道研究准教授は、整形外科医として上肢外傷を中心に臨床医学の研鑽を積み、特に、整形外科領域で未だ完全な治療が困難である腱・靭帯損傷の治療に強い関心を持ち、臨床・基礎研究の両面から再生医療・予防医学研究に取り組んでおり、次世代リーダーとしての研究活動が高く評価されました。

式では、那須学長が「岡山大学の次世代を担う若手人材として活躍し、更なる高みを目指してほしい」と激励しました。

参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id12965.html

PRESS
RELEASE

膵がんを取り囲み、治療を阻む「線維化障壁」の形成にかかわるタンパク質「ROCK2」を同定！ ～形成メカニズムと克服法の解析を可能とする実験基盤を確立～

岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域の狩野光伸教授、岡山大学学術研究院医歯薬学域(薬)の田中啓祥助教らの研究グループは、膵がんの特徴であり難治化の原因である「線維化障壁」の形成にタンパク質ROCK2が関与することを明らかにしました。

多くのがんの治療成績が近年改善している中で、膵がんの5年生存率は未だ1割ほどに留まっています。膵がんが難治である原因として、がん細胞周囲に特徴的に認められる「線維化」があります。線維化は、薬剤のがん細胞への到達を阻む障壁となり、膵がんの治療成績を悪化させます。これまで「線維化障壁」を実験的に再現することは難しく、詳細なメカニズムの解析は困難でした。

本研究では、独自の立体培養技術を駆使して、線維化障壁形成メカニズムの解析に挑み、タンパク質ROCK2の関与を突き止めました。本研究成果は、既に他の疾患での適応を目的として開発が進んでいるROCK2に対する薬剤の利用による「線維化障壁」の克服の可能性を示唆するもので、膵がんの治療成績の改善を実現していく足掛かりとなることを期待されます。 参考 https://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id1214.html

